様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 ２７ 日現在

機関番号：３８００１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００９８１

研究課題名（和文）葬墓制からみた琉球史に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A Fundamental Study on the Funeral and Grave System in the history of Ryukyu

研究代表者
宮城　弘樹（Miyagi, Hiroki）

沖縄国際大学・総合文化学部・准教授

研究者番号：７０７５７４１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は琉球列島の発掘墓資料に基づく歴史研究を目的とする。そこで、４つの基幹資料の集成を計画した。具体的には、①墓、蔵骨器である②厨子、厨子に記載される③銘書、そして厨子に納められる④人骨の一覧表と図録作成を行った。
　厨子（蔵骨器）の集成、銘書データのテキスト化を行い、２冊の資料集を刊行している。これら基礎資料を公開することで研究者はもとより一般の方もこれを利用し歴史を研究する環境を整備した。あわせて、学際的研究を推進するべく、沖縄県うるま市平安座島のトゥダチ墓の墓室内調査を実施した。これら一連の研究によって、葬墓制資料の基礎的研究を行うとともに、研究者間で課題を共有することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究によって集成された厨子（蔵骨器）の中でも、編年研究の未着手であった御殿形厨子の編年研究を推進することができ、考古学研究を推進するこたができた。また、研究研究成果として刊行された資料集により、関連する学問分野においても資料に容易にアクセスできる環境を整えることができた。
　現在、都市化や過疎化などにともなって、伝統的な墓が急速に失われつつある。沖縄では、近世といえども出土品は貴重な資料である。この点で墓は戦災を免れた王国時代の貴重な文化財を保護してきた収蔵庫と換言できる。墓とこれに安置される厨子（蔵骨器）などを、歴史を記憶する記録媒体として位置づけることで、社会的意義を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：This study involves historical research based on archaeological graves from the Ryukyu Archipelago. It was designed on the gathering of four types of key materials and was implemented by producing data tables and illustration catalogues for 1. the graves themselves, 2. the zushi funerary urns (bone containers), 3. the migachi (funerary inscriptions) written on the zushis and 4. the human remains contained in the zushis.
　The zushis collection and the transcription of the text of the migaachi were compiled into two volumes. Their publication provides a better environment for historical researches not only for the academic scholars but also for the general public. In addition, and in order to promote interdisciplinary research, the funerary chamber of the Tudachi Tomb in Henza Island was surveyed. The pluridisciplinarity of this project not only led to the conduction of basic research on funerary practices, but also permitted researchers in different fields to share common issues.

研究分野：考古学

キーワード：琉球史　歴史考古学　墓　厨子　出土人骨　銘書　葬墓制

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

琉球の発掘墓に関する研究は民俗学分野が先導し、都市開発に伴い埋蔵文化財の記録保存調査の対象として市町村教育委員会を中心に実施されてきた。

これまでにも学問的関心から各研究分野を中心に研究会が開催されている。具体的には、1989年地域史協議会が行った「南島の墓」を端緒にして、2003年には浦添市教育委員会、2005年には琉大史学会、2013年には沖縄考古学会で活発な議論が行われてきた。また、2015年には沖縄県立博物館・美術館で葬墓制をテーマとした展示会「琉球弧の葬墓制－風とサンゴの弔い－」が開催されるなど比較的関心は高い。

葬墓制に対する高い関心が存在する一方で、学問の垣根を越えた葬墓制の研究は乏しく。考古学分野では厨子甕等の編年的研究に、民俗分野においては葬墓制の各地域の事例報告にとどまっている。特に埋蔵文化財行政による調査報告は、100冊余りの報告書が刊行されているが、市町村単位というのが専らで、地域を越えた包括的な研究や学際的研究が乏しいのが現状である。多くの研究者に歴史史料としての価値が指摘されながらも、本来発掘された墓がもつその価値について充分に引き出されてこなかった。

その一因としてあげられるのが、発掘された墓の情報が、各関連分野の研究者が利用できる状況に乏しい点がある。墓の発掘調査が本格的に行われるようになったのは1990年代以降で、行政機関では記載等が不統一となっていることなども相まって、各分野の専門家とともに利用促進される状況に至らなかったと考えられる。結果として墓の出土資料の個別的研究に終始している現状がある。

２．研究の目的

沖縄は先の大戦で多くの歴史史料が失われた。数の少ない文書史料により前近代の歴史にアプローチしてきた。歴史学分野の研究についてもめざましいものがあるが、首里・那覇の士族層の文字資料に限られるため、地方や民衆の生活実態については不明な点も多い。

一方、古琉球から近世琉球において独自の文化として発展を遂げた葬墓制習俗は、死者を墓に安置し、一度送った後に洗骨し、骨を厨子甕や石厨子とよばれる専用の蔵骨器に納骨する。これらの厨子（蔵骨器）には、仏像や蓮花等の図像が描かれ、被葬者の死亡・洗骨年、氏名、時には履歴が銘書される。このため被葬者の生前の生活の様子や死者に対する社会の観念、いわゆる死生観を読み解く事のできる、数少ない同時代資料となっている。

そこで、本研究では博物館や各市町村教育委員会に保管されている墓調査資料を集成し、データベースを作成することで、学際的に葬墓制資料にアクセスできる研究のプラットホームの作成を試みることを第１の目的とした。

個々の墓調査資料のもつ歴史的特性を各専門分野による解析を踏まえて、最終的には同時代の個人史から家族史の一端を明らかにし、これを束ねて地域の社会史へと昇華させることを目標としている。

３．研究の方法

研究は大きく集成と分析及び現地調査に分けられる。集成と分析の対象としたのは主に３つの葬墓制資料である。

第１の資料は厨子（蔵骨器）である。「厨子（蔵骨器）」を型式学的に分類することで記載文字の無い資料についても、相対年代を付与できるように分類整理を行う。

第２は「厨子（蔵骨器）記載文字」のテキストデータを作成し、分析が容易に可能になるように、厨子（蔵骨器）、人骨とともに本データを公開し活用を図る。厨子（蔵骨器）の記載情報は、実際には被葬者の死亡・洗骨年、氏名が主で、情報量としてはそれほど多くはない。しかし、時には履歴が記され、墓売買の内容が記載されるなどの琉球の既知の歴史に無い情報もしばしば含まれており、これらの掘り起こしにより新しい琉球史の事実を発見することが期待できる。

第３は、厨子に納骨された「人骨」の調査と分析である。人骨調査によって、性別、年齢、病歴といった基本情報を収集し、厨子（蔵骨器）とともに地域や時系列、厨子配置といった考古学的情報とともに検討することで、被葬者のライフストーリーと社会的位置との関連性を解析することを可能とする。

上記に加え、実際に墓調査を計画、学際的な研究チームを組織し、うるま市平安座島のトゥダチ墓の調査を計画した。各学問分野の垣根を越えて相互に有用なデータを収集する中で問題点や課題点を共有する機会とした。

４．研究成果

研究において最初に着手したのが報告された厨子甕（蔵骨器）の集成である。発掘に限らず博物館等で保管資料も含め、図示された約4000点の資料を収集し資料集として刊行することができた。集成した資料に基づき、厨子甕（蔵骨器）の編年研究に貢献することができた。過去の時間的変遷を理解するため、精度の高い時間軸のモノサシが必要である。発掘墓の研究では墓の編

年研究と墓室内に安置される厨子甕（蔵骨器）等の編年の構築が望まれるが、現在これらの編年研究は上江洲均が行った 1980 年代の基礎的な編年研究と、安里進が 1990 年代後半に発表した厨子甕（蔵骨器）の編年研究が基本となっている。上記研究は優れた研究として長く厨子甕（蔵骨器）編年の基礎となっているが。資料数が増加した現在では、新たな課題も指摘されている。具体的には多様な厨子甕（蔵骨器）の形式が存在しているが、陶製御殿形厨子の編年研究がほとんど未着手となっている。そこで本研究では型式学的検討が未着手の陶製御殿形厨子の編年研究を行い、17 世紀後半から 20 世紀前半の陶製御殿形厨子を６型式に大別しその年代観を示すことができた。

墓に安置される厨子甕（蔵骨器）には被葬者の氏名、死亡・洗骨年、履歴等が記されていることが多く、銘書（ミガチ）と呼ばれている。銘書の内容等を既知の史料と整合させることで、先の考古学編年の相対年代に絶対年代を付与することが可能となる。銘書はこれまで各報告書に掲載され事例の個別的分析は行われてきたが、今回の研究によって、銘書を有する資料を約 4400 件収集し、テキストデータとして一覧表を作成することができた。

納められた被葬者の人骨については、人類学的手法により解析が可能である。各報告書に掲載された情報を収集整理し、これまでに約 4600 個体の人骨資料が報告されていることを確認することができた。また、既報告資料において 200 体の人骨資料について推定身長が算出されており、得られたデータから平均身長を推計することができた。具体的には男性が 157.89㎝、女性が 146.12㎝であることを求めることができた。あくまでも近世全体の平均身長となるが、一つ基準になる数値を示すことができた。

墓の学際的調査の実践例として、平安座島のトゥダチ墓の調査を行った。調査を実施したトゥダチ墓は、２つの墓口がありそれぞれ１、２号墓と仮称する。調査時は石やブロックが積まれ閉じられていたが、地元及びうるま市教育員会の協力を得て調査を実施した。墓室は１号が幅約７m、奥行約５m、高さ約２m、２号が幅約８m、南北約５m、高さ約２mの広い墓室空間を測る。前者は、墓室のほぼ中央には柱状に残された１本の石灰岩柱が、後者は２本の柱が配置されていた。１号と２号はおおよそ同じ規模の墓室空間でありながらも、棚のつくりなどが若干異なることも確認された。墓室内には骨を納めた厨子が確認され、１号墓の厨子の個数は 79 点、２号墓では厨子が約 109 点確認された。調査の結果トゥダチ墓は、1720 年代の故人を元祖とし、以後代々集落の人々を葬ったお墓と考えられ、１・２号ともに少なくとも戦後は既に利用されておらず、神御墓として利用されたと推定された。銘書も比較的多く含まれており、文献史学の分野から検討が行われた。また、それぞれの厨子甕に納められていたご遺骨は形質人類学の分野から調査が行われるなど、学問の枠を越えた合同調査を実施することができ、課題点などを共有することができた。

以上、本研究によって、琉球史研究において葬墓制資料がこれまで照射することのできなかった新しい歴史を掘り起こすことのできる可能性を示すことができた。また、約 100 遺跡、厨子（蔵骨器）4000 点、銘書（ミガチ）4400 件に加え、約 4600 個体の人骨報告例を集成することができた。このように集成された葬墓制資料を用い、いわゆる個別データに限らずこれをビックデータとして、統計的な検討を行うなど、それぞれの学門分野のテーマ関心はもちろん、学際的に検討することが今後期待される。

例えば死亡・洗骨年が記された紀年銘厨子を利用し死者数の変遷を検討する。また、厨子の型式学的検討を行い精緻な編年の検討を行う事で窯業史について検討を行うなど、歴史研究の基軸となる時間的な推移を研究・分析することが可能で、資料環境を整備することができた。

以上、本研究では、葬墓制資料として基軸となる厨子、銘書特に紀年銘資料及び人骨の３資料を集成し、厨子及び銘書については資料集を刊行させ、これまで学問分野ごとに分析されてきた資料を一瞥できる形で整理することで、各学問分野の垣根を越えたプラットホームをつくることができたことは、本研究における大きな社会的意義と言える。今後、これらのデータを用いた様々な研究が着手され、琉球史研究に発展に大きく寄与するものと確信する。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 宮城弘樹	４．巻 38
２．論文標題 御殿形厨子の研究（１）－紀年銘厨子の集成を中心として－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 南島考古	６．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮城弘樹	４．巻 149
２．論文標題 琉球列島（沖縄・奄美）	５．発行年 2019年
３．雑誌名 季刊考古学（特集　墓石の考古学）	６．最初と最後の頁 89-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮城弘樹	４．巻 150
２．論文標題 沖縄（葬墓制と葬送儀礼を考える）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 季刊考古学	６．最初と最後の頁 94-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮城弘樹	４．巻 20
２．論文標題 グスク時代の枠組みと時期区分の課題	５．発行年 2018年
３．雑誌名 琉大史学	６．最初と最後の頁 13-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮城弘樹	４．巻 45
２．論文標題 グスク時代初期の土坑墓－喜界島城久遺跡群の土坑墓との比較を中心として－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 地域調査	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮城弘樹	４．巻 39
２．論文標題 御殿形厨子の研究（２）－赤焼・荒焼御殿形厨子の編年－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 南島考古	６．最初と最後の頁 115-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮城弘樹	４．巻 22-1
２．論文標題 御殿形厨子の研究（３）－上焼御殿形厨子の編年－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 沖縄国際大学総合学術研究紀要	６．最初と最後の頁 23-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮城弘樹	４．巻 22
２．論文標題 御殿形厨子の研究（４）－陶製御殿形厨子の底孔に着目して－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 壺屋焼物博物館紀要	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 宮城弘樹	4．巻 478
2．論文標題 沖縄の葬墓制史と平安座島トゥダチ墓の石厨子（前）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 月刊石文化	6．最初と最後の頁 50-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 宮城弘樹	4．巻 479
2．論文標題 沖縄の葬墓制史と平安座島トゥダチ墓の石厨子（後）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 月刊石文化	6．最初と最後の頁 27-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 宮城弘樹
2．発表標題 あの世からみる近世琉球社会～お墓を調べてわかる事～
3．学会等名 令和2年度宜野湾市立博物館市民講座（招待講演）
4．発表年 2020年

1．発表者名 宮城弘樹
2．発表標題 御殿形厨子の編年
3．学会等名 沖縄考古学会　定例研究会
4．発表年 2019年

１．発表者名 宮城弘樹
２．発表標題 考古学からみたグスク時代から近世の墓について
３．学会等名 葬墓制からみた琉球史研究会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関